２０２１年7月１５日（木）

老球の細道６２０号

尊敬するコーチ新井春生先生との出会い⑤

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

前回に引き続き前能代工業監督加藤廣志氏と新井春生先生との出会いについて、加藤氏の著書『高さへの挑戦』から紹介したい。加藤氏も実は何度か会津に来ている。加藤氏が能代工業全盛時代を築いていた頃、会津地区からも何人か優秀なプレイヤーが能代工業バスケットボール部へ進学している。１９７９年（昭和５４）選抜大会とインターハイで全国優勝した時のキャプテンは鵜川正勝先生の教え子である斎藤慎一氏（日体大―日本鋼管）だった。鵜川先生の力添えで実現した加藤氏の会津での講演会に、若輩コーチだった私も参加して感動したことを今でも覚えている。二人の姿を思い浮かべながら読むと趣が深い。

【「今日の自分があるのは新井先生のおかげなんです。大学でもあんな指導者はいませんよ」。丸山（加藤氏大学時代の後輩）の言葉は新井に会いたいという私の気持ちに拍車をかけた。アジア大会が終わり、再び練習が始まった。木彫から受けた感動は日を増すごとに大きくなったような気がする】

私も新井先生からの手紙や著書をいただく度に先生に直接会いたい気持ちが強くなった。幸運にも先生の方から名古屋からマイクロバスで会津まで来てくれた。当時６０歳半ばを超ええていた先生が自分でマイクロバスを運転して来たのである。後に先生から聞いたことであるが、指導の壁にぶつかった時に何度か猪苗代野口記念館に来ていたようである。母親に大切に育てられた先生の境遇が野口英世と共通するからだという。

【大阪・岸和田で恒例の夏合宿を終えた私は、無性に新井という監督の指導ぶりをこの目で確かめたくなっていた。後輩で、浅草の魚屋の息子である中野幸一（元日本バスケットボール協会審判長）という男を誘って、丸山と３人で大阪から山陰本線の鈍行列車に飛び乗った。

安来への旅は衝動的な行為ではなかった。高校在学中に指導者になる志を立てた私にとっては、ごく自然な行動、最初から予定されていたコースだったような気がする。私たちは丸山の家に世話になりながら、二日ほど安来に滞在した。この間、胸をときめかせながら安来中学校の体育館を訪ねた覚えがある。コートに我々が目指す新井の姿を見つけた。しかもユニフォーム姿で。実際に自分もコートに立ち、選手と一緒に汗を流しながら教えていた。

面識もなく、しかも伝統のない新制リーグに所属する我々大学生を相手にしながら、新井は紳士的な態度で接してくれた。

「指導者というのは“そんなところまでみててくれているの”と選手がびっくりするくらい個々の特性を知り抜いていなければならないと思う」と新井は開口一番切り出した。「そのためには教え子とのやりとりを通じて一人一人の性格、癖、悩みに至るまでをしっかり把握しておかねばならないから、これがまた随分大変ことなのだ」とも言った。新井の言葉を聞いて、自分が見も知らぬ彼の作品に心が揺さぶられる理由がわかった気がした。選手一人一人に注ぎ込む愛情が深いのである】

〈続く〉